

小論文問題用紙

問題 次の文章を読んで、「うまく言葉でまとめられないもの尊さ」ということについて、あなたの考えを述べなさい。字数は七〇〇字以上八〇〇字以下とします。

ぼくの仕事には、どうしても「誰かの人生を言葉に換える」という作業が付いて回る。これが何年やっても慣れるということがなくて、毎回モヤモヤと悩まされる。具体的に何に悩まされるのかというと、「どれくらいその人のことを知ったら、その人の人生について書くことができるのか」という問いに悩まされるのだ。

この場合の「書くことができる」というのは、「能力的に可能か否か」と「資格があるかないか」という要素が複雑に絡み合う。仮に、波瀾万丈な人生を送った人物について書くとして、その混沌とした生命の足跡を「ぼくの文章力でまとめられるか」という問題と、「このぼくがまとめていいのか」という問題に頭を抱えることになる。

ぼくの経験上、二、四時間くらいの取材であれば前者の問いに振り切って考えることができる。「短い取材では深いところまで立ち入れませんから、とにかく文章だけは読みやすくまとめておきます」といった具合に。逆に、その人と三、四年がつり付き合うと、後者への手応えは得られるけど読みやすい文章に仕上げるというのが不可能になる。書きたいことが多すぎてまとめられない状態に陥るのだ。

ただ、ぼくはこの「まとめられない」というのが嫌いじゃない。むしろ、ものすごく好きだ。この感覚は、たまたま「思い出の写真を整理する」のに近いかもしれない。大切な人と映った写真を見返していくと、その一枚一枚についてのエピソードはいくらでも語れるのに、一緒に映っている人の人生や、その人が自分にとってどれだけ大切かを言葉で説明しようとすると、なかなかどうしてうまくいかない。

この「うまく言葉でまとめられないもの尊さ」に、どうしようもなく惹かれてしまって、なんとかそれを言葉で表わしたいと願うのだけれど、それをするだけの能力と資格がぼくにあるのか……と、最初の問いに戻るといふのをずっと繰り返している。

こうした言葉の問題は、ちよつと乱暴だけれど、「要約すること」と「一端を示すこと」に分けて考えられるかもしれない。

「要約する」というのは、大きな世界や複雑な物事の縮図を作ることだ。ここでは正確なミニチュアを作るための技術の巧拙が問われることになる。

対して「一端を示す」というのは、大きすぎて表現しきれないものの一部を見せて、その表現しきれなさを想像してもらうことだ。先の思い出写真の喩えで言うと、それぞれの写真にまつわるエピソードを伝えて、そこに映っている人の存在感の大きさを感じとってもらうこと、とでも言ったらいいだろうか。

学者というのは、どちらかと言うと「要約」のプロフェッショナルなだろう。というか、そうあるべきなのだろう。ぼく自身、物事を正確かつ緻密に言葉で表現する訓練を受けてきた（つもりです……）。

でも、世の中には「一端を示す」ことでしか表現できないものがある。ぼくの中にもある。伝え手側の言葉の技術ではもうどうしようもなくなって、とにかく受け手側の感受性や想像力を信じて託すしかない。そんな祈りに近い言葉でしか表現できないことがある。